

# 被災者への支援

ライフラインや家屋等に甚大な被害を受け、不自由な避難生活を余儀なくされた中で、県内外から多くのボランティアの方が駆け付け、被災者の生活を支援していただきました。



栄村復興支援機構「結い」代表

あいざわ ひろふみ  
相澤 博文さん

ことを知り、役場職員の生の声が放送されていました。新幹線が不通であったため、友人から車を借りて役場に着いたのがお昼頃で、役場内はまるでオモチャ箱をひっくり返したような状況でした。すぐに、副村長に会い、復興支援の窓口を作るのにぜひ協力したいと申し出ました。

3月15日夕方に、今後のボランティアの受入れや支援団体との連携等について、役場と関係団体が集まり、打合せを行いました。その結果、一時的なボランティアセンターではなく、村の復興まで見据えた組織で、村民の心に元氣と希望が湧く組織を目指し、村と栄村社会福祉協議会に加え、震災直後から支援を申し出ていたNPO法人雪の都GO雪共和国・NPO法人栄村ネットワーク・みゆき野青年会議所・長野県社会福祉協議会・日本

青年会議所長野ブロック協議会・中越防災安全推進機構の8団体で構成する栄村復興支援機構「結い」(以下「結い」という。)を3月17日夜に立ち上げ、翌3月18日から活動を始めました。  
有事の時に、「誰が何に困るのか」「何が必要で、何をすべきか」など、そうした対応に役立ったのは、中越地震でボランティア活動をした経験と構成団体との毎夜のミーティングによるものでした。

## 「結いのしょ」の活動

ボランティアでは、助けてあげるといふことでなく、村の仲間として入れてもらい、仲間としてお手伝いするという意識から、あえてボランティアという言葉は使わず、親しみを込めて「結いのしょ」



## 復興支援機構「結い」の発足

東日本大震災が起きた3月11日は東京の四谷のビルにいました。レセプションが始まるので地下から8階に上がったとたん揺れを感じ、そのうちに立っていられないほどの揺れで、階段にも辿り着けない状況でした。その後、友人宅まで皇居を通り3時間ほど歩き、そして次の朝3月12日、テレビを付けた途端、栄村で震度6強の地震が発生した



ボランティアの受付の様子 (役場2階議場)



「結い」の組織図



と呼んでもらい、信頼関係を作っていくことが最初の仕事でした。運営は、その日に集まった人に仕事を割り振る通常のボランティアセンターとは違い、インターネットを使い、ボランティアを登録制にしました。事前に集めた村民の方からのニーズに合わせて、必要なボランティアの方に村へ来ていただきました。  
当日は、午前8時30分から受付を行い、支援内容の説明、派遣地区等の割り振りをした後、午前9時30分から午後4時まで、がれきの片付け、家具の移動、ゴミ出しなど様々な支援をお願いしました。ボランティアの方は、多いとき

に120人、スタッフが40人、さらに相談に来られた村民の方の出入りもあり、当初は事務所から人が溢れていましたが、その後は比較的スムーズに進みました。  
「結い」では、「結いのしょ」(ボランティア)の派遣以外にも、震災直後から申し出た復旧イベントや支援等のお手伝い、仮設住宅集会所でのお茶飲みサロンの開催、復興計画策定のための中学生などを対象とした座談会の開催、村の復旧・復興の状況や「結いのしょ」の活動を載せた手作りの新聞の発行なども行ってきました。時間の経過とともに、支援の

ニーズが内容、量においても変化をしてきましたが、「地震の被害を克服し、村民の多様なニーズに対応した復興を図り、村民の力強い結束と希望のある地域づくりを支援する」という基本方針は、立ち上げ当時から一貫して変えず、活動を続けてきました。

被災から二度目の冬を迎える頃には、目に見える被害は随分と見えなくなり、震災復興村営住宅も整備され、それぞれの団地への入居の引越しの手伝いも無事に終わり、復旧から復興への峠を感じました。

7月の天皇后両陛下の行幸啓での懇談会にも「結い」の代表として参加させていただき、これまでの活動の報告ができたことは大変うれしく思っているところです。「結い」を通してボランティアに来てくれた人数は平成24年12月末現在で4、462名、その他、仮設住宅に直接支援に来ていただいた方も数えられないくらいの大勢の皆様が支援を受けた栄村です。小さくても輝く自律の村づくりの一步を改めて歩んでいくことが皆様への感謝のしるしと感じています。



県内外の保健師等の協力を得ながら、健康相談等を実施(特養「フランスーズ悠さかえ」)

### 保健活動

7箇所(7)の避難所が設置され、1週間程は医療救護班が常駐していない避難所に県や飯山市をはじめ近隣市町村の協力を得て、保健師が常駐、姉妹都市の武蔵村山市からも応援に駆け付けていただきました。村の保健師は包括的な対応とともに、避難所を回り村民の健康状態の把握に努めました。

避難所では、持病を抱える人への対応、ストレスや不眠によるメンタルケア、発熱や便秘など突発的な症状への対応など、慣れない集団生活による様々な症状や悩みに対応する必要があります。また、避難所のテレビから流れる東日本大震災の津波や原発事故の映像からパニックを起こした人、糖尿病患者で人目を気にしてインスリン注射ができなかった人、乳児を抱える親介護が必要な方、障がいを持っている方への配慮など、初期の慌ただしい時点では気づかない面もあり、今後の対応に課題を残しました。食生活では、避難所で出される弁当の他、温かい炊き出しや各地から届く食べ物や飲み物が食べ放題となり、また運動不足や野菜不足なども手伝って太る人、便秘になる人、入れ歯を持ち出せなかった人や慣れない食事で胃の調子を悪くする人など、災害時であっても食事のとり方やバランスのある食事の大切さに気付かされました。

避難指示が解除された後は、避難所や地域、仮設住宅での生活となり、範囲を広げた健康相談や集いの機会が必要となりましたが、



避難所を巡回診療する佐々木医師(栄中学校)

## 震災時の医療・保健活動

### 地震による健康被害と対応

地震発生後は、ほとんどの村民が家を飛び出し、屋外の道路や車の中で過ごしていました。役場には次々と建物の倒壊や断水等の被害状況が寄せられる中、人的な被害は軽傷者数人の報告で、重傷者や死亡者がいなかったことが奇跡的と思えるほどでした。

しかし、負傷者は少なくても今までの生活の基盤が破壊され、精神的に動揺を与え、大きな不安となったことは言うまでもありません。特に地震当日から始まった「被災建物の応急危険度判定」は危険度により赤(危険)・黄(要注意)・緑(調査済)で色分けして注意を

促したのですが、この目的が十分理解されないまま、赤や黄色の調査票を貼られた被災者にダメージを与える要因にもなりました。避難所では急性期の混乱はな

かったものの、避難所生活が始まると高血圧、便秘症、不眠症などの症状が顕著になってきました。そうした症状、ストレスや不安・悩みの解消をはじめとする健康相談や診療が行われました。また、ノロウイルスやインフルエンザ等の感染症予防、発生時の対策など各避難所を回り、注意喚起するとともに事前に常備薬や消毒液など必要物品を配置しました。

避難所は地震発生から10日目の3月21日によく避難指示が解除され、徐々に避難所で生活される方が少なくなり、6月19日に避難所が完全に閉鎖され、仮設住宅や地域(自宅)で過ごされる方への中長期にわたる保健・メンタルケアを行うことになりました。

地震で改めて感じたことは、村に内在している地域のつながりや助け合いの精神が非常時にも役立つ、健康や安心生活の支えになっているということでした。

在宅看護職信濃の会・長野県作業療法士会・長野県健康運動指導士会などの皆さんに駆け付けていただき、ボランティアとして各地区で開催する健康相談会に協力をしていただきました。

また、メンタルケアに関しては、県の精神保健福祉センターなど専門的機関の援助もあり、継続的な相談の実施などが行われています。

### 医療活動

地震当日の午前6時には、森地区などから役場へ避難する方も見受けられ、村の診療所の佐々木医師は早速往診カバンを持って駆け付けてくれました。避難された中に頭部に外傷を負われた方がいて、その応急処置にあたるなどされました。

その日の午前7時35分には、日本赤十字社長野県支部から安曇野赤十字病院と飯山赤十字病院の医療救護班が2チーム派遣され、7箇所の避難所のうち役場と特別養護老人ホーム「フランスーズ悠さかえ」に3日間常駐され、他の避難所にも巡回診療を行っていた

きました。この医療救護班を引き継ぐ形で、14日から18日まで県から須坂病院と飯水医師会の医療救護班が派遣されました。

今回の地震で一番の問題は、突然の避難指示と家の中の散乱で「医者からもらった薬」を持ち出せなかったことが避難者に不安を与えました。村の診療所にかかりつけの方は、幸いカルテがあったので薬を処方することができましたが、普段飲んでる薬の名前など知っている方は少なく、対応は難しかったと思います。災害時に必要な身の回り品に、薬やお薬手帳などが必要だと認識させられました。

村の診療所では散乱したカルテや医療器材等を整理し、翌日の13日から診療所で診療を再開しました。上下水道は使用できませんでしたが、できるだけ患者さんの不安を解消し、要望に応えられる体制を整えました。避難所にも巡回し、必要な方には診察や悩み相談にあたりました。また、歯科診療所の診療室はしばらくは水が使用できなかったため、避難所を回り、義歯の修理や口の中や歯に関して困っている方への相談に応じました。

復旧から復興…その中で

# 復興に向けたシンポジウムの開催

## 栄村の復興を考える会

震災後初めて、村民の皆さんが一堂に会して、震災による悩みごとや復興への思いを語り合う「栄村の復興を考える会」を、平成23年5月14日(土)午後1時30分から栄村学校ランチルームで開催しました。



当日は、村内外から約140名の方が集まり、阿部知事、島田村長も参加して、ワークショップ形式で意見交換が行われました。

意見交換では、2つのテーマ①震災から2か月を経て、現在抱えている悩みごと、困りごと、課題など②これからの栄村の復興イメージ(ごっこに、村民の皆さんの思いや意見等が多数出されました。



## 長野県北部地震・栄村シンポジウム

「復旧・復興の現状と今後の課題

～震災後7か月を経過して～」

信州大学中山間地域プロジェクトと村との共催によるシンポジウムを震災から7か月が経過した平

成23年10月16日(日)午後1時30分から栄村かたくりホールで開催しました。

当日は、村内外から約100名の方が集まり、信州大学農学部の木村和弘名誉教授による講演や村民の方が参加されたパネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッションでは、4名の方から各集落の復興に向けた取組みなどの発表が行われました。

